

「あとがき」にかえて

いまこの原稿を書いているのは、二〇一七年二月二四日の午前七時である。そう、村上春樹の新作長編『驕士团长殺し』（新潮社）の発売日で、午前零時に買いに走った読者も少なくなかっただろう。前作の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』が、僕にとっていまひとつのきだったから、春樹ファンとしては面白いといいなあとという期待がある。

十数年前に授業で村上春樹の小説を読んだ。『風の歌を聴け』から『ノルウェイの森』まで。六百人教室がほぼ埋まった。講義の準備が大変で、ほぼ毎回徹夜に近かった。三年目にその講義を録音して、かなり手を入れてある出版社から新書にした。その後、『1Q84』が出版されるにいたって、村上春樹研究が激増して、ついに行けなくなった。それで、いまは春樹ファンとして楽しむことにしている。研究者はついつい論じようと思って読んでしまうから、こういう現代作家を一人持つておくのも悪くないと思っている。

成城大学に勤務していた頃、ゼミの学生が「私は『こころ』が一番好きなので、石原先生の元では『こころ』を論じません」とわざわざ宣言しに来たことがある。その気持ちはよくわかった。卒業論文で『こころ』を論じるのと、好きで読むのとはだいぶちがう。論じるときには小説を切り刻まなければならないから、それは辛いこともある。「好きこそもの上手なれ」とはいかない。それに、僕は漱石文学を中心に論じているから、漱石文学だとしてどうしても求める水準が高くなりがちだ。それもいやだったのだろう。

それでは、僕はどうして卒業論文以来四〇年近くも漱石文学を論じ続けているのだろうか。それはやっぱり好きだからとしか言いようがない。楽しむ好きの上に論じる好きがあつて、その地点まで行けたからだとは思わない。楽しむ好きと論じる好きは、どうやら少しちがっているようだ。だから、村上春樹文学は楽しむ好きにしておこうと思つている。この論集のそれぞれの論文は、論者にとつて論じる好きになつていだろうか。

それにしても、なぜ文学などを論じる制度ができたのだろうか。それにはどういう意味があるのだろうか。僕は最近、文学を含む文化についてこう思つている。何度か書いたようなことだが、ここでは少し前に「時評 文芸」（産経新聞）に書いたことを繰り返しておきたい。

かつてコンニャクゼリーが開発されて、子供が喜んで食べた。ところが、これをのどに詰まらせて死亡する事故が起きた。そこで、危険な食べ物という認識が広まり、業界はのどに詰まりにくいように自主的に改良した。のどに食べ物を詰まらせて死亡する事故は毎年四千件以上起きていると言う。コンニャクゼリーの事故は平均すると毎年二件あるかないかだった。レアケースだったのだが、大きな問題となつたのだ。

お餅の死亡事故は毎年百件以上もある。コンニャクゼリーの比ではない。しかし、毎年これだけの死亡事故が起きていながら、お餅を改良しようという議論は起きない。理由は、お餅は文化だがコンニャクゼリーは文化になつていなかつたからだろう。水の事故死も毎年百件ほどだが、止めようという議論にはならない。自動車事故に至っては、毎年四千人以上の死者がでる。これは経済効果もさることながら、便利という名の文化になつているから、車を廃止しようという議論は大きくならないのだろう。文化ほど平気で人を殺すものはない。

かつて自民党は、臓器移植促進のためにいわゆる「脳死法案」を国会に提出した。しかし採決に当たっては、個人の死生観に関わる問題だとして、党議拘束をかけなかった。実際、自民党からも反対票がでた。政治が医学の問題を文化にゆだねた瞬間だった。

話をぐつと大きくしよう。いま、アメリカでは核兵器の小型化が進められている。もちろん、ミサイルに搭載するには小さい方がいいからで、したがって北朝鮮も核兵器の小型化には熱心だが、アメリカの場合はほかに理由がある。

いま仮に広島・長崎規模の核兵器を実際に使用したら、いかにアメリカといえども国際社会から強烈な非難をあびることは避けられない。そこで、小型化して使いやすくしようとしているわけだ。トランプ大統領も、核兵器の小型化には賛成だという。その使用は内戦を止めるためなどといった「人道的支援」に限るとして、これにもし「人道的核兵器」という名を与えたらどうだろうか。きつと使うだろう。名を与えることはそれを認めることだからだ。そして、名を与えるのは文化の仕事なのである。

もちろん、文化は不変ではない。テクノロジーによって変質しながら生き延びることもある。写真はデジタル技術によってフィルムを使わなくなっても写真である。これからの映画はコンピューター・グラフィックなしに生き延びられない。そして、文学も電子書籍が一般化しない限り、生き延びられないだろう。文化をあまりに固定的にしてしまうと、民族問題を激烈に引き起こす。人々の共感が得られる限り、時代につれて文化はゆるやかに変化してもいい。

僕の言いたいことはこうだ。世界の形を決めているのは文化であると。テクノロジーは、人の望むことなら何

でもかなえてくれる。あるロボット研究者が言っていた。「もうすぐ、人のできることならすべてロボットができる時代が来る。では人が生まれて、やりたいことをすべてロボットに任せて、ベビーベッドに寝たまま寿命を全うするのが人間らしい生き方と言えるのか」と。彼にして悩みは深いようだった。

テクノロジーは自動作用があるかのように進歩する。それを止めることができるのは文化しかない。どこまで進歩させるかを決めるのも文化しかない。大学では、文系学部の縮小は止まりそうもない。それは、僕たちが世界の形を決めることができなくなることを意味する。僕はただこのゆえに、文系学部の縮小に反対する。

あえて言うが、楽しむ好きは文化をそのまま受け入れることだが、論じる好きは文化を解剖し、あるときにはそれに異議申し立てをすることだ。それには自分たちの無意識を白日の下に曝す覚悟がいる。願わくは、この論集のそれぞれの論文がこうした覚悟を持ち、文化に対して意義を持つものでありますように。

(石原千秋)